

討議はいつものように時間不足であったが、要点を三つあげる。(1)聖書解釈といっても創世記、詩編、ヨハネ福音書、パウロ書簡等で異なる問題が開示される。創世記の場合、宇宙・人類・歴史の始まりが問われ、「始」と「源」をめぐる多様な論が展開される。ヘクサメロン文学は始源に終末をかさねるという特徴を持つ。アンブロシウスは創造と過越をかさねて新しい生の始めを語ったという。(2)比喩的象徴的解釈のほうが字義的解釈よりも高次とされる場合でも、後者を軽視せず、'ad litteram'を尊ぶことが聖書解釈史上歴然としている。また比喩といっても'facta-dicta'の非分離を前提する予型論が多用されたことは注意を要する。「知らんがために信ず」の立場に立てば、出来事の言語化の探究は聖書の靈的解釈の遂行なのである。(3)創造だけでなく創造記事をも概念化する試みがトマス以後活発である。創造における神の働きの無媒介性は principium と verbum の同一視でもって説明できず、創造の光を物体性一般の形相と見るとか、神の内なる創造を語るといことが起こった。この形而上学的要求が近代の批判的解釈とどう結びつくかは一考に値するであろう。

聖書と神学的言語

稲垣 良典

エックハルトは『創世記注解』の冒頭でトマス・アクィナスとモーゼス・マイモニデスの他に、アウグスティヌス、アンブロシウス、パシレイオスをアウクトリタスとして挙げており、今回のシンポジウムで行われたように、エックハルトとはほとんど千年の歳月によってへだてられたこれら後者の三人の著作家による『創世記』釈義をエックハルト自身の仕事と比較し、検討することは、示唆に富む、興味深い試みであるといえる。しかし、聖書釈義の問題、およびその歴史についてほとんど無知な私にはクリュクセン、荻野、森三教授による提題を簡潔に整理した上で問題点を指摘し、適切な論評を加えることはできない。そこで、シンポジウムの議論と何らか重なることを期待しつつ、個人的な研究関心に由来するコメントをのべることにしたい。

司会者の一人としてこれらの提題に耳を傾けている間に私の心に去来したのは、この三人の神学者たちが「字義的に」あるいは「靈的に」解釈することを試みた聖書の

言語と、それらの解釈・理解の営為のなかでこれら神学者自身によって形成された「神学的言語」との関係をめぐる問題であった。これら神学者たちはいずれも、聖書は神感を受けた記者によって聖霊の導きの下に記された——この「導き」が具体的にとった形については見解を異にしていたとしても——ものであり、その意味でそこに人間の言葉を通じて語られているのはまさしく神の言葉であることを肯定していた。他方、こうした神の言葉によって語られる真理を信仰をもって受け入れた上で、その真理を人間理性に可能なかぎり理解しようとする営為（信仰の知解としての神学）が生み出す言語、すなわち神学的言語は、いうまでもなく人間的言語である。

問題は、それぞれの神学者において神学的言語がどのように神の言葉としての聖書（的言語）へと秩序づけられていたかである。聖書と神学との関わりは、聖書にふくまれている神的啓示が明確な教義ないし教^{ドグマ}えとして定式化され（信条）、それら教義の真理を教導・学習に適した仕方^{ドクトリナ}で解説し、非難にたいして弁証する営為としての神学が成立する、という風にひとまず説明できる。しかし、このことは単に、聖書は神学的営為がそこから出発すべき源泉・素材と、神学的結論を裏付けるいわば神的な証言とを提供する書物にとどまることを意味するのではない。言いかえると、近代的視点においては別々の知的営為と解されがちな聖書釈義と、信仰の知解ないし「学」としての神学とは、かつては相互に親密に結びつき、一体化された営為として受けとめられていたのではないか、という問題である。さらに言いかえると、これら神学者たちは聖書において語りかけ、呼びかける神の現存——キリストとの出会い——のうちで神学的探求を遂行し、神学的探求を通じて再び聖書における神の言葉をより完全な仕方^{ドクトリナ}で聴きとり、それに従って生きることをめざしていたのではないか。教父および中世の「スコラ」神学者における聖書釈義、神学的探求および修道生活は（すくなくとも理念としては）一体的なものとして追求されていたことを確認できるのではないかと私は考える。

私がこのように考えるようになった背景には、通常「スコラ」神学の代表者として知られるトマスにおいて、聖書と神学との関わりは通説が提示するところとはかなり異なった仕方^{ドクトリナ}で解されていたという私なりの発見がある。『神学大全』を例にとつていうと、この未完の著作の全体が神学を学ぶ者を聖書におけるキリスト——人となられた神——との真の出会い（まさしく神学の道を通っての）へと導くことをめざして書かれたものであり、この著作の第一部から第二部を経て第三部にいたる神学的言語

の展開と変容——形而上学的な神学的言語から聖書的な神学的言語へ——がそのことを示しているのである。——司会者としての役割を逸脱したコメントになってしまったことをお詫びして結びとしたい。

提 題

被造性の意味をめぐって

——4世紀東西教父の『創世記』解釈点描——

荻野 弘之

問題の所在

- (1) 「教父的聖書解釈」と呼ぶべき聖書の読み方が、それ自体何か一つのものとしてあるのだろうか。
- (2) 聖書を「解釈する」という行為は何か。聖書を読むこと、聖書の言葉が分かること、そしてそれが伝わるということは何か。聖書の言語とは何か。それを問題にする場所はどこにあるか。
- (3) 聖書の中でも、とりわけ『創世記』解釈が問題になることの意味は何か。言い替えば『創世記』という書物は一体何か。そしてそれがもつ意味は、時代によって違った側面を見せるのか。

以上挙げた3つの問いは、相互に密接に関連しているので、以下、具体的に解きほぐして論じていきたい。

(1) ここで求むべき「教父的聖書解釈」とは、個々の教父の著作に示されている解釈の実例の単なる総和ではない。つまり(イ)同じ箇所、同じ主題に関しても教父の間で微妙な食い違い、時によっては正反対の見解が示される。(ロ)そのうちでアウグスティヌスはわれわれに比較的よく知られているが、アウグスティヌスの読みが特殊であり少数派である場合も少なくない。(ハ)また同じ『創世記』を扱っていても若年と晩年では解釈の傾向が異なる。(ニ)教父によってはそもそも手にしている聖書本文が違っている場合すらもある(後述するヨハネ8.25など)。かくして、ある著者の特定の著作だけを標準にすることで教父の全体を代表させるわけにはいかないが、他方、